

# 希望の吊り革

A life style OneUP English School recommends

おかしい。

しんじゅく

いつもの満員電車に乗った宮里香織は思った。朝の出勤時の悪名高き埼京線の人混みに揉まれ、吊り革を握りしめながら香織はこの異変について考えている。どうのもいつも同じ駅で同じ時間に並び、同じ吊り革を争うあのサラリーマンの男が、今週はなぜか吊り革争いを仕掛けでこない。今日も香織はすんなりと吊り革を奪取し、男の方を見たが、男は荷物を胸に抱え目をつむつたまま人混みに揉まれている。やっぱりおかしいと思いつながら、香織は鞄からテキストを取り出した。

その男とはかれこれ半年以上同じ吊り革を争っている。三十代。仕事もプライベートも充実したキャリアウーマン。平日は仕事で忙しく、土日は目いっぱい遊ぶのでせめて通勤時間くらいは英語の勉強をしない?と思いつ。香織は一念発起して通勤時間は必ずTOEICの勉強をする決めたのである。それまで満員電車の中で iPodで音楽を聴き、目をつむつて人混みに流されるままだったが、スクールのアドバイザーの勧めもあり通勤時間だけは、吊り革につかりテキストを開くようにならなかった。

そんな通勤電車の中での勉強は、始めて二、三週間で調子が出てきた。いつも決まった車両の決まった吊り革に上手につかまる事が出来ると自分で驚くくらい集中して勉強できるようになってしまったのである。こんな感じで勉強していくば半年くらいでかなり成長しそうだと思った二か月目くらいにその男は現れた。歳の頃なら四十代中盤。中背で小太り。黒縁のメガネを掛けているその目は細く、良く言えばシブイが悪く言えばオタクっぽい感じである。しかし身なりはいつも小奇麗。昔スポーツをしていたのか、太っている割に時々俊敏な動きをする。その男が登場するようになってから、毎朝、同じ時間・同じ車両で同じ吊り革を取り合いするようになつた。

初めのうちは互いの存在に気づかなかつたが、徐々に明らかに同じ吊り革を争っている実感を双方が持つようになつた。間一髪吊り革を男に奪われた時、無念の人混みに流れながら香織がそのままの吊り革をうらめしそうに見ていると、通勤電車の中で朝日を

浴びる男のメガネが満足そうにキラリと光り、クソーハのオタク野郎!と心中で叫んだものである。男も香織と同様に吊り革につかまると決まって本を取り出した。どうやら男も英語の勉強をしているらしかつた。

その男が、今週になってからバッタリと吊り革を奪いに来ないのである。月曜日から今日の金曜日まで毎日、目をつむつて人混みに揉みくちやにされている。香織は男に構わずTOEICのテキストを読みだすのだが、なにか気になつて仕方がない。

新宿へ。新宿へ。

いつものアナウンスで我に返り、香織は満員電車から吐き出されるように降りた。暑苦しい人混みの空氣から解放され気持ちの良い外気で生き返る。

ふと見ると傍らにあの男がいた。いつもは少し空いた埼京線にそのまま乗つて渋谷方面にいくその男が、今日はどうやら人混みに流されて新宿で一緒に吐き出されたらしい。フン、と思うて改札へ向かおうと男の前で踵を返して歩き出す瞬間。男が何かを呟いた。

えっ?と思ひ、歩きながら振り返ると、男は想像していたよりも低い声でこう言つた。

「海外赴任が決まりました。今まですいません。  
英語頑張ってください!」

思つてもみなかつた事を言われた香織は、何か言おうと口ごもつたが言う間もなく人混みに押されて視界から男が消えた。瞬く間に埼京線はまた渋山の人を吸い込み大崎方面へ発車した。男の姿ももうホームには無かつた。

以来、男は二度と電車に乗つてこなかつた。

香織はいつもの吊り革につかりテキストを開いた。この吊り革に捕まつて勉強したあの男が海外赴任したと思うと、何やらその吊り革が縁起が良いような気がしてきた。香織は吊り革を握りしめ少しだけ微笑み、ふたたび英語の勉強を始めた。